

李想白の小論「コーチの類型と進化」(昭和10年) に関する一考察

A Study on Sang-Beck Lee's "Type and Evolution of Coach" (1935)

及 川 佑 介

Yusuke OIKAWA

1. はじめに

本稿は、昭和初期の日本バスケットボール界の中心人物だった李想白が昭和10年に松本幸雄¹⁾の『籠球研究』²⁾第7号に寄稿した小論「コーチの類型と進化」を検討し、若干の考察を試みた。この小論は、当時のバスケットボールの指導法を9つに類型化する。しかもその類型化は全てを平等に位置づけるのではなく、レベルの違うものとして、つまり初歩的な指導法から熟練した指導法へと段階的に進化したものとして記述しているのである。したがって、この小論を考察することによって、当時の指導者の指導実態を明らかにできると同時に、大正期から昭和初期へと競技力の高度化を進めた当時のバスケットボールの技術・戦術の歴史的進化の一端を示すことができると考えた。

ここでは、まず李想白とバスケットボールのかかわりについて述べ、次に李想白によるコーチの類型と進化」を検討してその内容概略を示す。そして、そこで問題とされる戦術論を、「フォーメーション型から奔放型へ」、及び「奔放型及びシステム型から科学的プレー型へ」として考察する。

なお、「李想白」の漢字表記には「李相伯」、「李相伯」、または「想白李相伯」³⁾としている文献を確認できるが、本稿では彼の主著『指導籠球の

理論と実際』(昭和5年)にしたがい、「李想白」と記すこととする。

2. 李想白とバスケットボールのかかわり

李想白に関する実証的な研究の試みとしては、孫煥(現在韓国の中央大学教授)が筑波大学から博士の学位を授与された論文「戦前の在日朝鮮人留学生のスポーツ活動に関する歴史的研究」(平成10年)がある。この論文は全部で4章から構成されており、韓国の体育・スポーツに貢献した6名の人物が主に扱われている。李想白に関してはその中の一人ということなので、叙述の不充分さは否めない。内容は、彼の生い立ち、思想、同胞との関連が中心であった。孫煥は李想白のバスケットボールに関する内容についても触れているが、李想白の技術論を検討することはなく、彼の主著『指導籠球の理論と実際』の内容を前書きや目次に従って概略を述べているに過ぎない。

昭和58年の『RDR60』に掲載された富田毅郎の「李想白を語る」⁴⁾によると、李想白は明治36(1903)年大邱(韓国)の名家に4人兄弟の三男として生まれ、祖父、父、兄弟の影響を大きく受けて学問に親しんで育った。なお、次男の李相和(1901-1943)は混乱の時代を生きた民族詩人として知られている。

李想白は、大正8年に大邱高等普通学校を卒業し、大正10年に早稲田大学第一高等学院に入学し、その後、早稲田大学文学部に進学、さらに、早稲田大学大学院へ進んだ。専門は東洋学、社会学であった。早稲田大学第一高等学院で、李想白ははじめ軟式庭球を行っていたが、浅野延秋らのバスケットボール同好会に出会い、このときから李想白は、バスケットボールとかかわっていくことになる⁵⁾。

戦後、母国である韓国においてIOC委員をはじめとする各種の要職を務めた李想白は、昭和41年4月14日にソウルの病院で心筋梗塞のため死去した。その直後、日本政府は彼に対し勲3等旭日章⁶⁾を授与し、韓国政府は昭和45年12月に無窮花大勲章を与え、彼の功績を称えた⁷⁾。なお、生前にも李想白は昭和15年12月に、大日本バスケットボール協会（以下、「協会」と表記）が行った創立10周年記念式典で功労者として表彰されていたのである。

李想白が日本政府から勲3等旭日賞を与えられた理由は、賞勲局が書き残したメモ書きによると「元日本体育協会専務理事 韓国オリンピック委員会委員長 国際オリンピック委員会委員 わが国スポーツ界の発展、または、日韓国際親善に寄与」⁸⁾とある。こうしたスポーツ界の重鎮として活躍しはじめる転機になったのは、彼が発起人となり、協会を創立（昭和5年）させたことからであると考えられる。

昭和5年9月30日午後5時30分から協会の創立総会がキリスト教青年会において開かれた。出席者は理事の9名（李想白、富田毅郎⁹⁾、浅野延秋、田中寛次郎、野村瞳、松崎一雄、小林豊、妹尾堅吉、鈴木重武）であった。富田毅郎は李想白に相談して別室に当総会で創立決議して直ちに発表しようと新聞記者を呼んでいたという。そして、1930年10月1日正午、東京キリスト教青年会において、協会創立の声明を出した¹⁰⁾。その声明から協会は、競技規則の制定と競技の指導、そしてバスケットボールに関する年報の発行を事業の主

軸に置いていたと考えられる。

昭和5年10月22日において協会の理事会が開催された。四つの委員会（規則委員、審判委員、競技委員、編纂委員）が設けられ、李想白は規則委員会主任と編纂委員会に属していた。協会創立の声明における事業の内容三点と委員会の四つをみると、それぞれに関連性があるように思える。

各委員会は10名前後で構成されており、委員会を二つ以上掛け持っていた者は、李想白、鈴木重武、田中寛次郎、黒沢威夫、大橋貞雄、阪勘造であった。この中で、委員会の主任でありながら、委員会を掛け持っていたのは李想白のみである。李想白は規則委員と編纂委員に属していたことから、その活動をしていただろうことは予想がつく。

その他、審判委員と競技委員においても李想白は関わっていたようであり、審判委員に関しては、昭和11年に行われたオリンピック・ベルリン大会で李想白は日本人としては初のバスケットボールの国際審判員となり、草分け的存在となっている¹¹⁾。

また、李想白は競技委員会に関しては、昭和5年10月18日に『指導籠球の理論と実際』を指導者育成の意を込めて出版している。さらに、技術指導のため全国を東奔西走し当時の日本バスケットボール界に、李想白の理論が行渡ったと評されるほどであった¹²⁾。協会創立時に主張した三つの声明と協会における委員会四つは関連しており、その委員会の活動すべて李想白が中心的役割を担い、先導することができる立場に置かれていたと考えられる。

富田毅郎は李想白について「李想白という人は新しい日本のバスケットについて、こうでなくてはならないという信念をもっていた。だから早稲田大学が近代バスケットのスタートを切れたわけで、彼は研究熱心というのか、理念をもった人として重要だったんです」¹³⁾と述べたのであった。

昭和51年3月、李想白の10周年忌を記念した大会が韓国で行われ、そこに早稲田大学が招待を受け

た。この遠征が契機となり、昭和53年から毎年、両国の学生選抜チームによる、「李相佰杯争奪日韓学生バスケットボール大会」が開催されている。

3. 「コーチの類型と進化」の概略

ここでは、李想白の「コーチの類型と進化」で記されているコーチの類型9通りの概略を示し、若干の考察をする。

李想白がバスケットボールの指導者を観察し、大別した9通りのコーチの類型は表1の通りである。表1では、①～⑨へ進むにつれて、初歩的な指導者から熟練した指導者へと段階的に記されている。

表1について叙述していく前に、確認して置くべきバスケットボール用語の問題がある。それは、フォーメーション、セットプレー、システム、といったチーム戦術で複数人の動きを表す言葉が、現代と当時ではその意味が異なっていると考えられるからである。それらの言葉を定義づけた資料は現在のところ見当たらず、現代では様々な使い方とされているように思える¹⁴⁾。そこで、昭和10年における李想白の「コーチの類型と進化」に記されている内容を基準として、フォーメーション、セットプレー、システム、のバスケットボール用語の意味を以下のように整理した。

フォーメーションとは、複数人の決められた動

表1. 李想白によるコーチの類型9通りの概略

(李想白「コーチの類型と進化」『籠球研究(第7号)』所収、松本幸雄、1935.10、pp.1-2、より作成)

①観念型	技術・戦術などの研究は行わないことから、「頑張れ」、「しっかりやれ」、「元気がない」ということしか発言しない。競技者のときに技術等へ関心を抱かなかった者がこのコーチの型になる。練習をし過ぎる傾向がある。
②机上型	実際に試合の経験がなく、机上の空論を基として指導する。誰にも理解し難い独特の論法を行う。そして、能力の低い選手を酷使する傾向にある。
③フォーメーション型	バスケットボールはフォーメーションのみであると思っている。観念型や机上型もこの型になる傾向がある。フォーメーションで成功する機会は、思っているよりも少ないことに驚き、落胆するであろう。
④基礎技術型	このコーチの段階からバスケットボールの指導者らしくなる。しかし、基礎技術に練習の時間を使い過ぎる傾向にある。団体的要素の重大さを認識できていない。
⑤セットプレー型	セットプレーの練習に多くの時間を費やすコーチである。フォーメーション型と異なる点は、基礎技術やプレーの深い知識を持っている。フォーメーション型の多くは素人であるが、セットプレー型は玄人である。このコーチの欠点は、セットプレー以外のことを軽視、または、無視する傾向にある。そして、基礎技術をセットプレーで活かすことができない。
⑥奔放型	個人の能力のみで実践しているコーチである。成功すれば非常に見栄えのするチームとなり、失敗すればかなり乱れたチームを作ることになる。攻撃法では速攻法を第一の武器とすることが多い。この理想的な型は、アメリカの職業チームにある。
⑦システム型	チーム戦術であるシステムのことばかりを主張する傾向にある。基礎技術型とセットプレー型を経てシステム型へ至ることがある。基礎技術とセットプレーの混合やプレーとプレーの連結がよい。チームワークのことばかりを指導することから個人の能力を活かせない。臨機応変にプレーできなくなる。遅攻法になることが多い。この理想的な型は、アメリカの一流大学チームにある。

⑧科学的プレー型	奔放型とシステム型を合わせた総合型といえる。科学的になったバスケットボールの真実を会得している。競技者が自由に、あるいは統制的に動くことができる。また、攻撃法では速攻法や遅攻法を自在に用いることができる。このコーチの型が最も理想的な型である。しかし、この型が完成されているチームをみることは少ない。
⑨老熟型	コーチの型というよりも、その態度についての分類である。以上の8種の型は比較的若いコーチに見受けられる。老熟型は経験を積み、老成する型であり、あまり焦らず、怒らない。そして、そのチームにおいて可能な能力を予想でき、その範囲内で最善を尽くすことができる。口数が多くはなく、急所を把握している。冗談をいっている内にいつの間にか指導になっていることがある。

きを表した戦術の一局面のことであり、セットプレーとは、フォーメーションに基礎技術の知識を加味した戦術のことである。そして、システムとは、基礎技術とセットプレーの混合であり、プレーとプレーとの連続性がある戦術を意味する。つまり、フォーメーションとセットプレーは、チーム戦術の一局面のことで、システムとは一つひとつの局面を総合したものであり、局面間を連続し得るチーム戦術のことを指すである。

さらに、表1の李想白が示す指導者の素人と玄人との境は、フォーメーション型と基礎技術型(③～④)の間にある。フォーメーションという複数人の動きよりも、基礎技術という個人の動きの方が熟練した指導者の段階にあると示されている。

また、指導者の素人的段階にフォーメーション型(③)があり、基礎技術型(④)とセットプレー型(⑤)を合わせるとシステム型(⑦)となり、奔放型(⑥)とシステム型(⑦)を合わせると科学的プレー型(⑧)になるという見解は、一連した技術・戦術の流れを示しているように思える。

そこで、昭和10年に李想白が著した「コーチの類型と進化」は、初歩的な指導者から熟練した指導者へと段階的に記されているだけでなく、彼がバスケットボールに携わった大正期から昭和10年頃までの技術・戦術の流れを李想白は表現しようとしていたのではなかろうか。後段では、フォーメーション型、奔放型、システム型、科学

的プレー型、の四通りの型を主に取り上げ、李想白が著したコーチの類型化と大正期から昭和初期における技術・戦術には関係性があるのかを考察していくこととする。

4. フォーメーション型から奔放型へ

昭和5年に出版された李想白の著『指導籃球の理論と実際』によると、彼は国際大会、または国外チームとの対抗試合の結果や内容を挙げて、日本バスケットボールの競技水準を計っている。中でも、「日本籃球の国際的位置又は関係を考へるとき、先づ念頭に浮ぶのは極東オリンピック競技会である」¹⁵⁾と考えていた李想白は、第9回極東選手権競技・東京大会(昭和5年)に出場した日本チームの競技力を次のように評価している。

「近時漸く比・支に対して、雁行する機運は認められる」¹⁶⁾。「第九回極東選手権大会に於いては、日本チームは見事に中国に二勝し、比島と一勝一敗して決勝を行ひ遂ひにこれに敗れたが、此競技会を通ほして日本の籠球が、漸く東洋の優位に近づいてゐること、そして漸次更により広くより大きな国際的舞台に進出すべき途程にあることを、一般に啓示するものがあつた」¹⁷⁾。つまり、日本チームの競技力が上昇してきていることを認めていたのである。

それでは大正6年から国際大会に参加しはじめた日本は、どのようなバスケットボールを目指していたのだろうか。

大正期の極東選手権競技大会報告書にみられる戦評には、いくつかの特徴が見受けられる。例えば、大正10年に開催された第5回極東選手権競技・上海大会では、「比軍は其のパスに、チームワークに於て又ボールをインバウンド(コート内にボールを入れること：筆者補足)にする事に於いて実に立派なやり方を致して居りました、我チームがコーチから学んだのを其のまま見せられた様な気がしたのであります」¹⁸⁾と評されている。このことから、試合の内容を評価する場合に、チーム戦術を取り入れているのかが一つの尺度にされており、日本チームもチーム戦術を実践で用いようと練習していたことがわかる。

また、第7回極東選手権競技・マニラ大会(大正14年)では、フィリピンチームの「洗練されたフォーメーションは正確と敏捷の点に於て全く他を圧して居た。日本ではとても見られないと思はれる。今回比軍が優勝した原因の第一は此の卓越せる攻撃力を有つた事であると思ふ」¹⁹⁾というように、ここでもチーム戦術であるフォーメーションを取り上げているだけでなく、フォーメーションという言葉が多く使われているように思える。フォーメーションを取り入れようとするのが大正期のバスケットボールの特徴があったと考えられる。

さらに、チーム戦術・フォーメーションの評価を攻撃法では取り上げられているものの、防御法での評価をされていないことは注目に値する。そして、パスやシュートの基礎技術は評価の対象になっているのに、ドリブル技術は全く取り上げられていなかったことも指摘しておきたい。

そこで次に、昭和5年における第9回極東選手権競技・東京大会での新聞記事による戦評をみることにする。すると、チーム戦術またはフォーメーションというような言葉は全く使われず、日本チームとフィリピンチームを比較している記事で「基礎技術の修得とか作戦等に於ては何等日本チームの上に出てゐない」²⁰⁾と記述されており、チーム戦術に関係しているような言葉は「作戦」

のみであった。しかし、「作戦」という言葉のみでは、チーム戦術のことを述べているのか、攻撃法と防御法のどちらを指しているのかわからない。

また、「大橋ドリブルに華軍のデフェンス左を割って野投を決め」²¹⁾というように、ドリブル技術に対する記事が幾度か載っている。このことから、昭和5年の第9回極東選手権競技・東京大会において、大正10年の第5回極東選手権競技・上海大会や大正14年の第7回極東選手権競技・マニラ大会のように、チーム戦術・フォーメーションに対して評価されているのではなく、ドリブル技術を用いた個人プレーに対して高く評価されていたのである。

基礎技術の中で、大正期に評価の対象となっていなかったドリブル技術が、昭和5年の第9回極東選手権競技・東京大会では評価されるようになったことは、一つの転換期であると考えられる。

昭和5年にドリブル技術が評価される以前の状況について李想白は次のように記述している。²²⁾

バスケットボールの技術中、各方面より最も多く議論されてゐるものを挙げるならば、此ドリブルを以て先づその第一に推されなければならぬであらう。或はその用途について、或はその功過について、諸説粉々としてゐるのであるが、甚だしきに至つては競技の前途の爲めに、此技術の存在を許すべきものか否かについて、天下の輿論を沸騰させた事例すらある位である。兩三年前の米国に於ける天下の公議が即ちそれであり、又此公論に従つて規則委員会に於いてすら、一年の猶予期限を附して、ドリブル禁止の建議を採用実行せんとする好意ある態度をさへ示した程であつた。その主なる理由は此技術の赴く所競技の粗暴を招来し、従つて又その技術の熟達するに従つて、防御者側の困難を益々増大し、これらの原因に伴ふ結果として、或は競技中に於けるストーリングの横行、個人主義的傾

向の増大など、何れも競技前途の為に、望ましからざる部面を招発するものであるといふのである。

このように李想白は、それまでのドリブル技術に対する周囲の考えを踏まえた上で、次のようなドリブル技術の可能性を述べている。²³⁾

此様な歴史と由来について考へてみても、此技術を正しく利用する事の、如何に困難なものであるかが分かるのである。同時に又、それが使用方法の如何によつては、容易に絶大なる強力を發揮すべきものである事も、推察するに難くない。即ち此技術は、それを使用する人の技術と態度の巧拙適否によつて、活殺自在の能力を併はせ有する、一種の劇薬的作用を蔵してゐるものと見る事が出来るのである。

つまり、李想白はドリブル技術の使用を躊躇しながらも、その技術に潜む効果的な可能性を示唆しているのである。

したがって、ドリブル技術はボールを前方へ運ぶための技術ではなく、攻撃法の中に取り入れることが、「近代の進歩せる籠球」²⁴⁾において「真に調和せるチーム」²⁵⁾を作り出すことができると李想白は述べていたのである。そして、ドリブル技術を用いたチーム戦術は、奔放型のチーム作りであると考えられるといえよう。

5. 奔放型及びシステム型から科学的プレー型へ

李想白がいうコーチの奔放型とは速攻法及び個人、システム型とは遅攻法及び複数を指している、全く逆のコーチの型・攻撃法であると考えられる。

コーチのシステム型で遅攻法といえは、システムプレーという戦術のことである。システムプレーとは、競技者が一定に配置された状態から開始

するフォーメーションとフォーメーションとの連結した戦術法であり、プレーとプレーとの連続性を戦術で取り入れた方法のことである。

一般にシステムプレーのわが国への導入は、アメリカからジャック・ガードナー (Jack Gardner) を招聘して昭和8年に行われた講習会であったとされている²⁶⁾。確かにシステムプレーという言葉が文献に見られるようになるのはそのときからのようであるが、しかし似たような表現や内容は、すでに大正時代から存在し、技術向上への試行錯誤は繰り返されていた。その流れを体験していた李想白は、昭和5年に出版した『指導籠球の理論と実際』においてシステムプレーという言葉自体は用いていなかったが、そう呼んでもいいようなチーム戦術論を積極的に述べていたのである。すでに日本に存在したこのような素地の上にジャック・ガードナーの持ち込んだシステムプレーは理解され、受け入れられたように思われる。

システムプレーが一般的に受け入れられていった昭和8年での技術・戦術を叙述するときに、忘れていけないのは昭和11年にオリンピック・ベルリン大会が控えていたことである。その大会で、はじめてバスケットボール競技が正式種目として編入されたのであり、もちろん、まだ昭和8年の時点では、オリンピックでバスケットボールが行われることは決定していない。

オリンピック・ベルリン大会で、日本バスケットボールチームのコーチとして戦法の指揮を一任された三橋誠は、昭和10年に松本幸雄の『籠球研究 (第7号)』で、「改正規則につきて」と題して、寄稿している。そこで彼は、二つの改訂規則を挙げている。一つはジャンプボールのときに、ボールがタップされるまで、他の競技者はサークル外に位置していなければならないこと、もう一つは、三秒ルールが「フリースローレーン内に於て三秒以上ボールを保持する事の不可」であったものから、ボールを保持している競技者だけでなく、「ボールを有する (即ち攻めつつある) チームの競技者はフリースロー・レーン内に三秒

以上立入ることを許さない」²⁷⁾という規則に改訂されたことを挙げている。この二つの改訂によって、三橋誠は身長差があっても平等に試合を行うことができると述べ、この改正が長身者対策に有効であると考えていた。

昭和10年の規則改訂で、三橋誠がもう一つ注目したのは、「フリースローのゴール成らば、ボールはフリースローが成されたるゴールのエンドライン外任意の地点より、フリースローをなした相手方チームによるイン・プレーとせらる」²⁸⁾という改訂点である。従来の規則では、このような場合でも全てセンタージャンプによっていたので、ゲームがしばしば中断されていた。ところがこの改正で試合はスピードアップされ、「非常なる好結果を得られるものと思ふ」²⁹⁾と記しているのである。この彼の指摘は、規則書にも「此改訂はゲームを著しくスピード化することになるものと信ずる。」³⁰⁾と記されていたことから、規則の改訂によって試合のスピードアップ化を図っていたことがわかり、三橋誠は速攻法に注目していたと考えられる。

競技者の身長差については、国外チームとの試合を考えるときに、しばしば問題として挙げられていた。例えば、昭和8年に協会の役員らによる座談会で、「どんなに日本の選手が技術的に巧くなつても、アメリカでは又それと同じだけの技術が出来る選手が居つて、其選手は日本の選手よりも体が大きいといふ点に於て、大抵の場合はアメリカの選手が有利な位置に立つ」³¹⁾と発言があったり、オリンピック・ベルリン大会のときには日本代表団から身長別でバスケットボールの試合を行うことが提案されるほど³²⁾、日本のバスケットボール関係者にとって身長差の問題は、話題に取り上げられる内容であった。

当時の競技規則の改訂を、三橋誠は日本のバスケットボールにとって課題であった競技者の身長差問題を緩和させる可能性があると考えていた。そして、彼は競技規則の改訂に伴う試合のスピードアップ化を考慮して速攻法を推奨していた。こ

れらの三橋誠の視点は、国際試合を視野に入れていたこと、そして、彼は李想白がいう奔放型よりのコーチであったことを指摘できよう。

しかし、昭和10年はシステムプレーを会得しようとした流れが、以前よりその戦術を李想白らによって進められていた時期であった。この昭和10年に、速攻法とシステムプレー(遅攻法)について『体育と競技』で竹内虎士が論じている。「籠球に於けるシステムプレイの考察-特に偶発法との価値の比較に就て-」と題された論稿であり、偶発法とは速攻法のことを指している。

彼によると、昭和初期において速攻法を主に用いるチームと、システムプレーを主に用いるチームが混在しており、昭和10年時には「システムプレイと、速攻法の対立は激しくなり、現在我國の籠球は二者の緊張関係により発展しつつある」³³⁾という。つまり、昭和10年の日本のバスケットボールでは、速攻法とシステムプレーのどちらも用いる攻撃法へ移っていたことを竹内虎士は報告している。しかも、それは李想白や三橋誠などから、直接、システムプレーの話をして知り得たことをまとめて論じたのであった。

昭和11年のオリンピック・ベルリン大会で三橋誠は、「速攻が出来ない場合にポストプレー(システムプレーの一つである8の字連続移行法)³⁴⁾を指している(筆者補足)に移る、取ったら速攻をやるといふのが僕の一番の目的だったのです」³⁵⁾と、速攻法とシステムプレー(遅攻法)を組み合わせたチーム戦術を目的として掲げていた。しかし、実際には速攻法を「大ざっぱな攻撃法」³⁶⁾、「なかなか怖くてやれなかったな。」³⁷⁾と、三橋誠はオリンピック・ベルリン大会を振り返っていたことから、そこでの日本チームの主な攻撃法はシステムプレーであったと考えられる。

昭和11年のオリンピック・ベルリン大会において、日本チームはシステムプレーと速攻法とを組み合わせようとしていたが、日本の競技水準は、それを実行するまでには至ってなかったのである。つまり、李想白が『籠球研究』で示した理想

の型・科学的プレー型を目指していたが、結果、システム型・システムプレーでオリンピック・ベルリン大会に挑んだのであった。

李想白が理想のコーチ像として挙げた科学的プレー型は、奔放型・速攻法とシステム型・システムプレーを併せ持つ、自由自在にプレーが連続されるチームであった。システムプレーが一般へ理解されはじめた昭和8年よりも前の昭和5年において彼の主著『指導籠球の理論と実際』で、戦術にシステムをいち早く必要性を感じていたことは上記した通りである。そして、驚くべきことは、昭和4年の時点で、李想白は韓国の京城YMCAとの練習試合を通して、戦術に科学的研鑽は不可欠であり、科学的な戦術には速攻法を交えなければならないことを述べているのである³⁸⁾。

オリンピック・ベルリン大会（昭和11年）の次大会はオリンピック・東京大会であるはずであったが、幻のオリンピックになった。オリンピック・ベルリン大会が開催される以前から李想白は、「私の先走る予想は、早くもベルリンの戦いを越して更に一九四〇年東京に於ける第十二回大会へと飛んでゐる。」³⁹⁾と述べていた。昭和11年に、李想白が「コーチの類型と進化」の中で示したシステム型の競技水準まで達していた日本チームは、東京でのオリンピックが昭和14年に催されていたならば、科学的プレー型の段階へ到達していたのではなかろうか。

6. おわりに

本稿では、昭和10年における李想白の小論「コーチの類型と進化」で示された9通りのコーチの型について考察した。

彼の論稿は、大日本体育協会による『アスレックス』（大正11年～昭和7年：ここでの李想白の初出は大正15年）や協会の機関誌『籠球』（昭和6年～）、松本幸雄の『籠球研究』（昭和9年～昭和11年）など、数多く見受けられる。そして、そうした論稿で技術・戦術を扱うときは、他の資料をもとに彼の考えを記しているものであるが、

「コーチの類型と進化」では、李想白独自の立場でコーチの技術・戦術面に即した分類を思うがまま叙述しているのは、珍しい論稿であると思われる。

本稿では昭和10年における李想白の「コーチの類型と進化」に記されている内容を基準として、フォーメーション、セットプレー、システム、のバスケットボール用語の意味を次のように整理した。フォーメーションとは、複数人の決められた動きを表した戦術の一局面的なことであり、セットプレーとは、フォーメーションに基礎技術の知識を加味した戦術のことである。そして、システムとは、基礎技術とセットプレーの混合であり、プレーとプレーとの連続性がある戦術を意味する。つまり、フォーメーションとセットプレーは、チーム戦術の一局面的なことで、システムとは一つひとつの局面を総合したものであり、局面間を連続し得るチーム戦術のことを指すである。

「コーチの類型と進化」では、フォーメーションやセットプレーという一局面的な戦術が連結することでシステムとなり、システムに速攻法（奔放型）が加わると科学的プレーへと戦術が成熟していくことを段階的に記されていた。

李想白は、コーチの類型における成熟段階を示しながら、日本バスケットボール界のチーム戦術の移り変わりと競技水準との関係、及び今後の技術・戦術の方向性を次のように感じていたと考えられる。

大正期では主にフォーメーションを用いるバスケットボールを会得し、昭和期に入り基礎技術の重要性に気付き、それをチーム戦術で活かそうとしたことでセットプレーを習得する。そして、昭和5年には個人の能力を尊重した戦術として速攻法が用いられたことでドリブル技術の認識が変化する。昭和8年には、プレーとプレーとの連結を必要としたことでシステムプレーが一般的に用いられはじめ、昭和11年のオリンピック・ベルリン大会で日本チームは、システムプレーを武器としてはじめての世界大会へ挑んだ。さらなる技術的向上を目指し、速攻法とシステムプレーを組み

合わせて、自由自在にプレーが連続していく攻撃法として科学的プレーを取り入れようとしていたのである。

なお、李想白の「コーチの類型と進化」は、昭和58年に早稲田大学バスケットボール部60年史として出版された『RDR60』に搭載された富田毅郎の「李想白を語る」の中に再録されていた。これは昭和10年に書いた李想白の意図に、富田毅郎は約半世紀を経過した時代においても共感するものがあったからではなかろうか。そして現代のスポーツのコーチを見渡したときにも、思い当たる状況を感じるのである。

本稿は、平成20年度国士舘大学体育学部附属体育研究所研究助成金を受けて行われたものである。記して感謝の意を表したい。

注及び引用文献

- 1) 及川佑介「松本幸雄に関する一考察－昭和前半期におけるバスケットボールの歴史－」『多様な身体への目覚め－身体訓練の歴史に学ぶ－』所収、IOM社、2006.10、pp.352-369
- 2) 及川佑介「松本幸雄『籠球研究』(昭和9年～昭和11年)に関する一考察」『体育史研究(第24号)』所収、日本体育学会体育史専門分科会、2007.3、pp.1-13
- 3) 「想白」は韓国という「号」に当たる。(『「想白」李相伯先生追念学術講演会」のプログラム』1994.6、表紙、ソウル大学での聴き取り調査(2008.8.26))
- 4) 早稲田大学RDR倶楽部編『RDR60』1983.2、pp.170-175
- 5) 日本バスケットボール協会編『バスケットボールの歩み』1981.3、p.232
早稲田大学RDR倶楽部編『RDR60』1983.2、p.175
- 6) 旭日賞は勲1等から勲6等までであり、勲3等旭日賞は、「勲三等旭日賞ハ中綬ヲ以テ喉下に佩フ」と記されている。(「勲章佩用心得」賞勲局、日にち不明)
- 7) 早稲田大学RDR倶楽部編『RDR60』1983.2、p.175
- 8) 「李想白に勲章を与えるために内閣府賞勲局が残したメモ書き」(日にち不明)
- 9) 富田毅郎は、早稲田大学バスケットボール部出身者であり、李想白の1年後輩にあたる。彼は協会が創立した当初から理事を務め、理事長(昭和20～25年)、副会長(昭和28～39年)などを歴任した。そして、多磨霊園にある彼が眠る墓の墓誌には、
「勲四等瑞宝章 富田毅郎 昭和六十年十二月六日没 行年八十一才」と記されていた。(『東京朝日新聞』1930.10.2、p.3、早稲田大学RDR倶楽部編『RDR60』1983.2、pp.329-333、多磨霊園での調査、2008.7.2)
- 10) 朝日新聞(東京)、1930.10.2、p.3
- 11) 浅野延秋「籠球代表の行動に就て」『伯林大會報告書』所収、1938.4、p.4
- 12) 早稲田大学RDR倶楽部編『RDR60』1983.2、p.170
- 13) 早稲田大学RDR倶楽部編『RDR60』1983.2、p.167
- 14) 昭和39年のオリンピック・東京大会で日本チーム男子の監督を務めた吉井四郎は、フォーメーションとシステムの言葉を使い分けてチーム戦術を説明していることから、現代におけるバスケットボール用語の一例として以下で簡単に挙げることにする。吉井四郎が著した『バスケットボールのコーチング戦法・作戦編』(昭和52年)では、例えば同位置に配置した3名での攻撃法があり、幾通りの方法が存在するとともに、幾通りの可能性がある。それら全てをまとめた攻撃法、及びプレーの連続性をシステムとし、そのうち一つの方法をフォーメーションと表しているのである。しかし、セットプレーに関しては、その意味を示す叙述はなかった。(吉井四郎著『バスケットボールのコーチング戦法・作戦編』大修館書店、1977.5、pp.46-47)
- 15) 李想白著『指導籠球の理論と実際』春陽堂、1930.10、p.22
- 16) 上掲書、pp.22-23
- 17) 上掲書、pp.22-23
- 18) 大日本体育協会『第五回極東競技大会報告』1921.8、p.121
- 19) 大日本体育協会『第七回極東競技大会報告』1925.9、p.198
- 20) 読売新聞(朝刊)、1930.6.13、p.6
- 21) 読売新聞(朝刊)、1930.5.25、p.7
- 22) 李想白著『指導籠球の理論と実際』春陽堂、1930.10、p.278
- 23) 上掲書、p.279
- 24) 上掲書、p.453
- 25) 上掲書、p.453
- 26) 牧山圭秀「バスケットボールの技術史」『スポーツの技術史』所収、大修館書店、1972.6、p.384(この書籍には、ガードナーの来日は昭和4年と記されているが、昭和8年の誤りである) テックス・ウィンター著、笈田欣治監訳『バスケットボールトライアングルオフense』大修館書店、2007.7、監訳者前書き pp.3-4
- 27) 三橋誠「改正規則につきて」『籠球研究(第7号)』所収、松本幸雄、p.4
- 28) 上掲書、p.4
- 29) 上掲書、p.4
- 30) 大日本バスケットボール協会『昭和十・十一年度

バスケットボール競技規則』p.8

- 31) 李想白、浅野延秋、竹崎道雄ほか「ガードナーアンダーソンと語る」『籠球（第8号）』所収、大日本バスケットボール協会、1933.11、p.8
- 32) 李想白「国際会議を中心として－FIB伯林会議に出席するの記－」『籠球（第18号）』所収、1936.12、p.49
- 33) 竹内虎士「籠球に於けるシステムプレイの考察－特に偶発法との価値の比較に就て－」『体育と競技』所収、目黒書店、1935.6、p.34
- 34) 8の字連続移行法とはポストプレーの一種で、ポストにいる競技者を中心として8の字を描くように他の競技者が動くという攻撃法であり、座談会で三橋誠は8の字連続移行法をオリンピック・ベルリン大会で用いていたことを発言している。
- 35) 三橋誠、浅野延秋、高橋太郎ほか「オリンピック遠征軍座談会」『第十一回オリンピック大会籠球報告書』所収、大日本バスケットボール協会、1938.4、p.59
- 36) 三橋誠、浅野延秋、高橋太郎ほか「オリンピック遠征軍座談会」『第十一回オリンピック大会籠球報告書』所収、大日本バスケットボール協会、1938.4、p.59
- 37) 上掲書、p.60
- 38) 李想白「京城YM籠球団を見ての随想」『アスレックス（第7巻第5号）』所収、大日本体育協会、1929.5、pp.84-89
- 39) 李想白「一大転機に立つ籠球」『籠球研究（第9号）』所収、松本幸雄、1936.3、p.2